
月と夜空と少年の歌

久世はるや

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月と夜空と少年の歌

【Nコード】

N3867P

【作者名】

久世はるや

【あらすじ】

設定としてはありがちな感が否めませんが：古い時代の、ある国での物語。奴隷であり歌い手である少年と、その世話をする青年、彼ら二人の一瞬の邂逅を描きました。

その少年に、呼び名はなかった。彼を名で呼ぶ必要がなかったからである。

少年は月の光のような銀色の髪をして、夜空をはめ込んだかのような紫紺色の眼を持ち、清らかな声で歌をうたった。透きとおる水のような、降りしきる雨のような、きらめく水晶のような少年の声は、物悲しい旋律を奏でて聴く人々をあまねく涙させた。異国の言葉でうたわれるそれらの意味を解する者はいない。しかしそれでも、少年がうたうというそれだけで、人々は哀傷へと誘われた。

少年の出自を知る者もまた誰もいなかった。銀の髪も紫紺の眼も、この国には生まれえぬものだ。ある日行商人に連れられてきた少年は、この城の主たる王に高い値で買われ、以来城の地下で暮らしている。王の命で召されるままに少年はうたった。人々はひそやかに、少年は人ならざるものの化身なのではないかと囁きあった。

わたしもそんな噂をどこかで信じていたひとりだった。

ありがとう

予期せぬ小さな声に、わたしは危うく食事の乗った盆を取り落としそうになってしまった。

狭い部屋の中、当然それを発したのはここに住まう少年なのだが、わたしは もちろん他の人々もそうであろうが 彼がこの国の言葉を口にするのを聞いたことはない。

わたしは、「食事を置いたらすぐに戻れ」という決まりに背き、言葉がわかるのか、と疑問を投げかけた。

すると少年は逆に驚いたように目を睨り、それからこりと微笑

んで頷いた。

少しだけ。難しいことは、わからないけど。

確かに、少年の口調はややたどたどしい。それでも、彼の異国の歌しか聞いたことのないわたしには新鮮な響きだった。

少年は御前に出るときの煌びやかな衣装とは似ても似つかない粗末な衣服を着ていた。小柄で、少々骨ばった体格はまだ彼が大きく成長する前であることを示している。

わたしがまじまじと観察していたのに気づいたらしい。少年はどこか恥ずかしそうに笑ってから言った。

あなたは、初めてここに来たね。

そう。わたしはここに来るのは初めてだった。今まで少年に食事を運んでいた者が先日急な病を得て死んだのだ。わたしが代わりにあたるのが決まったのも突然だった。こうしてここに来るまで、わたしはひどく緊張していた。

それを少年にゆっくりと説明すると、彼は悲しそうな顔をした。

あの人、死んだんだ。

なぜそんなにつらそうにするのか、と問うてみる。彼とは決して話してはならないとされているわたしたち側の人間の死に、少年が特別な感情を抱く必要はまるでないだろう。

しかし、少年は長い睫毛に縁取られた目を伏せて、小さな声で答えた。

あの人、僕のせいで死んだのかもしれないから。

わたしは、はっとして少年の顔を見返した。

今この少年は、わたしの前任者の死に責任があるというようなことを言わなかったか。彼はこの少年のせいで死んだのか。……ならば、わたしは、

急に不安になったわたしは、少年にもっと話すよう言った。彼は戸惑うような素振りを見せたが、やがて訥々と語り始めた。

あの人、僕に言葉を教えてくれた。あの人に会うまで、あいつとも知らなかった。禁を犯している、とも言ってた……だから、

もし、僕と話していたから死んだのだったら、

少年は声を途切れさせ、俯いて裸足のつま先を見つめた。

わたしは唐突に恐怖に襲われた。

病死、と伝えられた前任者の死が、もし、そうではなかったら。

少年と話した故に殺されたのだとしたら。

それならばわたしも、今日こうして少年と言葉を交わしたことが誰かに知れたら、病と称して殺されるのではなからうか。

……そうは思ったものの、わたしは溜息をひとつ吐くにとどめた。異国の歌をうたう奴隷である以前に、目の前にいるのはまだ幼さの残る少年なのだ。いたずらに彼を不安がらせても仕方ない。

わたしは自らを落ち着かせるように呼吸をしながら、そのようなことはきつとないから安心しろ、と言った。

ありがとう、あなたは優しいね。

少年の言葉はまるで生きているように、わたしを包み込んでやがて消えた。

わたしはそれにひとつ首肯を返して、牢のような地下室を出た。

石造りの階段を上っていくわたしの背を、少年の歌声が追いかけてきた。

甘美な旋律に酔いながら外に出たわたしを迎えたのは、曇りのない満月と紺碧の空だった。

* * *

それからわたしは朝と夕の二度、少年に食事を届け、様々な話をした。

少年は年の割に多くのことを知っていた。物心つく前から幾人もの行商人の手を渡ったのだという。そうして少年は彼らの生活のために歌をうたい、幾人もの金持ちに買われては売られ、流離ってき

た。

少年の話はとても興味深く、時々うたう歌は実に魅力的であったのだが、わたしは同時に異変を感じていた。

少年のもとを離れ、自分の部屋に戻った時に全身を襲う、疲労と倦怠。少年に食事を届けるといふことの他に、わたしの生活において変わったことはない。つまり、この異変は少年に因るということだ。

城の地下という場所が悪いのかとも考えた。しかし、他にも地下を働く場とする者も多くいて、彼らは全く健康である。訳のわからぬ重みに苛まれているのはわたしだけのようだった。

わたしはついに、信頼のおける友人に相談した。

彼は神妙な顔でわたしの話を聞いていたが、やがて思い当たるところがあつたのか、わたしを心配そうな目で見た。

博識な彼は、わたしにある民の話をした。

その民は美しい声で歌をうたい、話をして、聴く者を惑わすという。彼らの声を長らく聴いた者は、まるで麻薬を使ったかのように身体を崩し、やがて死ぬ。

わたしは愕然とした。

前任者の死は、少年の声を近くで聴きすぎた故だったのだ。

それから、何故そのことを知りながら、それを王に進言しないのかと彼を問い詰めた。

すると彼は力なく首を振って、もう駄目なのだ、と言った。

この民についての記述を彼が目にしたのは偶然のこと。しかも本来、我々のような身分のそう高くない者が見ることなど許されない文献であった。つまり進言をする以前の問題なのである。

そして、王はすでに、少年の歌を聴きすぎた。

王はいずれ、死ぬだろう。

さらに彼は、恐ろしいことを口にした。

あの少年を買うつと決めたのは誰だったか、と。

わたしはすぐに答えようとし　やめた。

それは、王を支え政を進める男。王の右腕たる、宰相である。

国を思ふならばこれを知ったときに少年を王から引きはがすべきだった、しかしあの男がそれを許すとは思えない。それが彼の言い分だった。

確かに、王を少年に殺させようとする者が、少年の辞去を認めるはずがない。

わたしはそれから彼に聞けるだけのことを聞き出し、そして、少年の住む地下へ向かった。

少年は、いなかった。

今頃御前に出てうたっているのだろうか。

少年は、自らの声がどんなに恐ろしいものなのかを知らないはずだ。単なる食事係の死すらを悲しむ彼が、王を殺すためであると知りながら、歌をうたうものか。

わたしは国を愛し、王を尊敬している。国のために命をささげることすら厭わない。

だからわたしは、少年を殺めることを決めた。

わたしは地下室で少年を待った。やがて戻ってきた彼は、いつもと同じ粗末な衣服を着て、深い色の眼でわたしを見つめた。

どうしたの、

そう問う彼に応えず、わたしは彼に、うたってくれと言った。

どうして、

いいから。早く。わたしの決意が変わる前に。

うたえ。

そのための、人形なのだろう。

少年は戸惑いをその白い顔に映したが、あきらめたように小さく息を吸って、うたいはじめた。

少年の声は、透きとおる水のように、降りしきる雨のように、きらめく水晶のように、美しかった。わたしはその声に酔った。自然と涙があふれてきて、それは止るうとしなかった。少年はただひたすらにうたった。わたしのためだけに。

そうして、わたしは手にしていた短剣で、少年の胸を貫いた。

少年の歌は不自然に途切れ、その唇からは清んだ歌ではなく濁った血が流れだした。

がくり、と少年の膝が折れる。

彼が息絶えたのを確かめたわたしは、短剣の向きを変え、それを自らの胸に突き立てた。

遠のく意識の中で、わたしはふと、理解した。

少年の歌は、別れの歌だったのだと。

別れをうたう故の物悲しさ、哀傷、そして甘美さ。それが誰も心のふれたのだと。

さようなら、とわたしは言った。

国と、自身と、そして憐れな少年へ。

きつと今も、銀色の月は紫紺色の空に浮かんでいるのだろう。

*
*
*

少年と青年の死からそれほど経たぬうちに、その国は滅びたのだという。

遠い、遠い昔の物語である。

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3867p/>

月と夜空と少年の歌

2010年12月8日23時56分発行